

ながらいなり  
55 長柄稲荷(ヘビ長屋)

伝承地：宇都宮市栄町5-2 (長柄稲荷)

話者：29



(長柄稲荷)

この長柄稲荷とヘビにまつわる言い伝えである。

古くから城下町として栄えた宇都宮には、伝馬町、鉄炮町、曲師町、大工町、博労町など、それぞれに意味や由来のある町名が残っている。

小門町もそれらの中の一つで、中心部からはずれた下町にあり比較的小割の家が多いということから、ついた名であるという。

この小門町(現在は栄町)には、長柄稲荷と呼ばれるヘビを祭った神社が今も残っているが、ここで紹介する物語は、

明治のはじめごろ、小門町の片すみに古びた長屋がありました。長屋には大工、左官、魚屋、うどん屋などいろいろな人が住んでいましたが、その中に山口宇堂と言う尺八の師匠がいました。ある時、二荒山神社の境内に見世物小屋が掛かりました。虎や象などの南方の動物、曲芸をする犬や猿、人間の言葉を喋る鳥などいろいろめずらしいものがありました。中でも長さ3mをこえる真白なヘビは、小屋一番の呼び物でした。この話しを聞きつけて、見世物小屋には宇都宮かいわいはおろか、遠く小山や真岡の方からも見物人が集まりました。小屋の前は、連日見物人の長い列でにぎわっていました。

しかし、興行が終りに近づいたころ、このヘビが弱って今にも死にそうになってしまいました。そこで、見世物小屋をたたむ時にヘビを二荒山神社の裏山へ捨ててしまいました。ところが、自然に帰った白ヘビはたちまち元気を取りもどし宇都宮の下町かいわいを這いまわらうようになりました。そのうち、山口師が尺八を吹くと、必ずその音に誘われるように小さな庭先にヘビが現われるようになりました。山口師の弟子達は毎夜のように姿を見せる白ヘビを気味悪るがってとうとう殺してしまいました。

殺されたヘビの皮は、近所の大工さんの手に渡りました。大工さんは、これを三味線屋に売ろうとしたが油がのりすぎて使い物にならないといわれたので、家の片すみにほうり投げていました。

ある時、大工さんの子供の火遊びから火事が起こり、小門町はいうに及ばず周辺の町を焼きつくす大火が起こっただけでなく、山口師の一家は熱病にかかり死にたえてしまいました。

後に、町内の人々が、火事で命を落した人々の供養をしたところ、ヘビの化身が現われたので、凶事はヘビのたたりだとして、ヘビを祭るほこら(長柄稲荷)を建てただけでなく火伏せの神様としてあつく信仰したとのこと。

